

D. H. ロレンス: *The Spinner and the Monks* の文体と構造

川崎医療短期大学 一般教養

清水 雅子

(昭和60年8月23日受理)

The Style and Structure of D.H.Lawrence's *The Spinner and the Monks*

Masako SHIMIZU

Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

Kurashiki 701-01, Japan

(Received on Aug. 23, 1985)

Key words: darkness, sun, 対比構造・比喩

概 要

Twilight in Italy に収められた紀行文 *The Spinner and the Monks* は、ロレンスの生涯にわたるテーマ——生きた交歓の回復——に深い関わりをもつ二元的世界「光」と「闇」が語、文、パラグラフ、情景描写全体に見事に表出された作品である。本稿では、対比表現と比喩表現を中心に作品構造と文体価値を論究する。

(1)

The Spinner and the Monks⁽¹⁾ は *Twilight in Italy* (1916) に収められた小品であるが、ロレンス特有の哲学が作品構造に見事に表出されている興味深い紀行文である。

ロレンスの生涯にわたる関心事は、自己と他者、人と自然、人と宇宙の間に失われてしまった living connection (生命に充ちた交歓) を回復させることであった。*The Spinner and the Monks* も又、その例外ではなく、作品を構成するひとつひとつの情景が、ロレンスと各各の対象との関わりを描き、living connection

の有り様がどのようなものであるかを示唆する、思想性の高い作品とみなすことが出来る。

本稿では、ロレンスの意味での living connection が、作品構造にどのように表されているかを、文体的価値の面から論究する。

(2)

The Spinner and the Monks は、次の6つの描写で構成されている。

- (1) 導入の部分 教会の分類: the Churches of the Dove と the Church of the Eagle パラグラフ1~5

- (2) the Church of San Tammaso の描写
パラグラフ 6～21
- (3) the spinner の描写
パラグラフ 22～43
- (4) the primrose の描写
パラグラフ 44～52
- (5) the monks の描写
パラグラフ 53～65
- (6) 結末の部分
パラグラフ 66～67

上記の描写及び叙述を、この作品構造の主要素と考えられる対比表現と比喻表現を中心として文体を解明する。

パラグラフ 1～5は、次の the Church of San Tammaso へ向かう必然性を語る部分である。この叙述の枠は以下のように、語、文、パラグラフ全体に及んで対比構造によって組まれている。

パラグラフ 1

The Holy Spirit is a Dove, or an Eagle.
(以下 筆者下線)

パラグラフ 2

And there are, standing over the Christian world, the Churches of the Dove and the Churches of the Eagle.

パラグラフ 3

The Churches of the Dove are shy and hidden: . . .

パラグラフ 4

But the Churches of the Eagle stand high, . . .

パラグラフ 5

The Churches of San Francesco was a Church of the Dove.

“and the Holy Spirit descended upon him in bodily form, as a dove, . . .”

(Luke iii, 22) という聖書の記述から「Dove の如き聖霊」と「Eagle の如き聖霊」という二元的発想を起し、教会の種類を対立的に分類し、これから尋ねていくことになる the Church of San Tammaso を Eagle に属する

教会として性格づけていく。パラグラフ 1 で語 Dove と Eagle が対をなし、パラグラフ 2 で語句 the Church of the Dove と the Church of the Eagle, パラグラフ 3 とパラグラフ 4 では、文頭文が対を成してパラグラフ構造全体が対比される。更にパラグラフ 2 と 4 の文頭の接続詞 And と But は、小さな視点から大きな視点へと視野を拡大して内容を敷衍する働きをしている。ロレンスにおいては、文と文、パラグラフとパラグラフが and や so 等の順接の、あるいは but や however 等の逆接の接続詞によって、同じ意味の語や文が反復されながら、文章化の過程がそのまま作品となる場合が多く、時として論点が浮動するため、読者はロレンスの定まらない思考につられて堂々巡りをさせられることがある。このような接続詞の用法と比べると、この導入部分においては対構造を成す語、文、パラグラフに加えて、並列文の使用が、叙述に歯ぎれのよい直截さと均衡を与え、その中で And と But が無駄なく用いられてパラグラフ構造に適切な論理性を与える効果を発揮している。

(3)

導入部分に続く the Church of San Tammaso の描写には、文体価値があると思われる 2 つの表現がある。まず、教会への道の途中で出会った土着のイタリーの人の描写にみられる 2 つの対比表現をみよう。

(1) The Italian people are called ‘Children of the Sun’. They might better be called ‘Children of the Shadow’.⁽²⁾

(2) And I was pale, and clear, and evanescent, like the light, and they were dark, and close, and constant, like the shadow.⁽³⁾

引用(1) Italian を通常の概念 Sun と対立して Children of the Shadow と呼ぶ表現は、このパラグラフ内にとどまらず、次の spinner の描写における比喻表現 sun との対立概念となる構造的語いであると同時に、終結部におい

ては、思想的意味を付加される重要な語である。引用(2)においても、自己と対峙する存在として Italian を認識し、各々の本質を like the light, like the shadow という対比的比喻で表現している。又、この2つの like ~ は and の多用によるうねるような文体に均衡と抑制を与える効果をあげている。

更に、この shadow という語及び dark という語は、ロレンスが土着の Italian に内在する spirit に感応し言語化した彼特有の語であることでも重要な意味がある。彼は旅の人であった、とはよく言われることであるし、事実そうであった。我々は、彼の旅から多くの意味をくみとることが出来るが、何よりも、spirit of place (土地の霊) に感応し、それを言語化することが出来た作家であったこと、又その感応した spirit を自己特有の哲学に適応させ文学性を付与することの出来た作家であったことに、稀有な資質を見出すのである。shadow は、このあと論ずる darkness と同質の語であり、ロレンス文学を理解しようとする者は決して無視出来ない key word のひとつである。

次に、この darkness が表現の核となる教会内部の描写における文体価値をみる。

I went into the church. It was very dark, and impregnated with centuries of incense. It affected me like the lair of some enormous creature. My senses were roused, they sprang awake in the hot, spiced darkness. My skin was expectant, as if it expected some contact, some embrace, as if it were aware of the contiguity of the physical world, the physical contact with the darkness and the heavy, suggestive substance of the enclosure. It was a thick, fierce darkness of the senses. But my soul shrank.⁽⁴⁾

教会はロレンスが好む描写対象である。この紀行文と同じ時期に書かれた *The Rainbow* から、リンカーン大聖堂でのウィル・ブラングウェンの体験描写と併せて考えると、上記引用個

所が表す意味がより明らかになるであろう。

Away from time, always outside of time!
Between east and west, between dawn and sunset, the church lay like a seed in silence, dark before germination, silenced after death. Containing birth and death, potential with all the noise and transitation of life, the cathedral remained hushed, a great involved seed, whereof the flower would be radiant life inconceivable, but whose beginning and whose end were the circle of silence. Spanned round with the rainbow, the jewelled gloom folded music upon silence, light upon darkness, fecundity upon death, as a seed folds leaf upon leaf and silence upon the root and the flower, . . .

Here in the church, "before" and "after" were folded together, all was contained in oneness. . . .⁽⁵⁾

リンカーン大聖堂での体験描写に及ばないにしても、ここで darkness, physical, sense を反復することによってロレンスが意図したのは、読者の皮膚感覚を呼びますことによって教会との connection が肉体を通してなされることを知らせることであった。fierce darkness of the senses は、*The Rainbow* の circle of silence と同義語句である。描写対象を、たとえそれが沈黙というようなものであっても言語化しなければならないのは文学者の宿命であるが、この darkness も silence の世界であり、言葉のない世界を言葉によってイメージ化しなければならなかったロレンスに、作家としての業があったように思える。彼はそれを更に incarnate しようとした作家であった。ここでは教会の肉体化が意図されている点でロレンス的である。*The Rainbow*における all was contained in oneness . . . とウィルが体験した教会との肉における一体感とその描写は、soul が fresh の上位に位置する、あるいは対立するとみなす

従来のキリスト教的宗教観からは理解しえない性質のものである。ロレンスは、人間は soul と flesh を同時に内包して初めて全一なる人 (whole man) となり得るのであり、soul が解き放たれる場所は、生命の根源体 flesh の内にあり、人は flesh においてのみ oneness を体験出来ると主張する。darkness は flesh において対象と一体となれる場を意味し、その時 soul が感応する経験的な通過儀礼としての意味をもつ。晩年の詩集 Last Poems, 特に The Ship of Death には、この darkness と darkness を中心とした暗喩と、静寂の中での肉体を見事に合致させたロレンスの言葉の世界がまざまざと展開される。しかし、今論を進めている *The Spinner and the Monks* は、初期の、テーマ追求のスタートに位置する作品であり、教会内での体験描写は oneness の境地に至ることなく対立状態は維持されたままで、次の spinner との出会いの場面に移る。

(4)

the Church of San Tammaso のテラスで布を織る小柄な老女は、shadow, darkness の対立概念として捉えられている。ロレンスは彼女を多量の比喻を用いて表現しているが、それらを以下のように整理し、その文体的価値と、作品構造における効果を考える。

(1) 全体像を表現する比喻

like the gray church
like a fragment of church
like a living stone
like a stone rolled down

(2) 容貌を表現する比喻

hair . . . like dirty snow
face . . . like a sun worn stone
 like an old stone
eyes . . . as the sky
 as the heavens
 like the visible heavnes
 like two flowers
 as the skys

like the fruit morning of the world

(3) 布を織る動作に関する比喻

like a little wind
like a grasp of brown fingers
like a thing in a gay wind
like a motion without thought
as butterflies
as in a sleep

(4) 老女の本質を表現する比喻

the core and centre to the world
the sun
the substance of the knowledge
the apple
like the creation
like the beginning of the world
the first morning
like the morning

(5) 互いの関係を表現する比喻

the universe
the stars
microcosm
like the morning
like a piece of night and moonshine
like the moon in the daytime sky

以上の分類から、老女の全体的外観を表現するのに stone という比喻が多く用いられていることを知る。stone が我々に喚起するイメージは無表情、不動、硬質、強力等であって、老女は他者との関わりを拒否する隔絶された存在として登場する。同様に硬質な比喻が用いられている容貌の中で、目だけは heaven, sky, flower というような美しさを内包する比喻が用いられて印象的であるが、これらも又、clear であり、transcendent な透明感を漂わせて、不動、静的なイメージを与える。このような動きのない状態にあって、布を織る動作を表す一連の比喻は、老女のイメージに軽やかさを付加し、文体に動きを与えている。比喻群の中で最もロレンスの意味が現れているのは、老女の本質と互いの関係を表す宇宙の事物、動きに関する比喻であろう。宇宙は既に論じた darkness と共に、

ロレンスの思想性をになう語として深化、発展した重要な語として重要である。この場面では、老女と作者の間の隔絶感が宇宙の運行における morning と night という対立的概念を示す比喻で表現されていることに、作品構造に合致した対比構造をみる事が出来る。

So she stood in the sunshine on the little platform, old and yet like the morning, erect and solitary, sun-coloured, sun-discoloured, whilst I at her elbow, like a piece of night and moonshine, stood smiling into her eyes, afraid lest she should deny me existence.

Which she did. She had stopped talking, did not look at me any more, but went on with her spinning, the brown shuttle twisting gaily. So she stood, belonging to the sunshine and the weather, taking no more notice of me than of the dark-stained caper-bush which hung from the wall above her head, whilst I, waiting at her side, was like the moon in the daytime sky, overshone, obliterated, in spite of my black clothes.⁽⁶⁾

このように、like the morning, like a piece of night と対立した比喻は、老女に sun-coloured, sun-discoloured, belonging to the sunshine などの語句、作者に moon, overshone, obliterated などの語句を重ねることによって、老女に光のイメージを、作者に暗闇のイメージを植えつけることになる。光と闇は、ここでも対比的に捉えられているのであるが、ロレンスは対立の状態のまま終わろうとしていないこと、絶えず union を目指していることを念頭に置いておく必要がある。逆に言えば、人は union あるいは oneness を希求する時、初めて自己と他者との疎外感を覚えるのであり、*The Spinner and the Monks* における対立感とはロレンスの一体感への希求の程度を我々に伝えるものである。そしてロレンスの oneness のあり方も又、spinner との関わりに示されて

いるのである。

So we conceive the stars. We are told they are other worlds. But the stars are the clustered and single gleaming lights in the night-sky of our world. When I come home at night, there are the stars. When I cease to exist as the microcosm, when I begin to think of the cosmos, then the stars are other worlds. Then the macrocosm absorbs me. But the macrocosm is not me. It is something which I, the microcosm, am not.⁽⁷⁾

spinner と作者との関わり方は、上のように宇宙における星にたとえて述べられている。星の世界は我々の世界とは別の世界であるが、宇宙の中では相互関係をもって生きている、というこの星の均衡に表された哲学を、ロレンスはどこでヒントを得たか定かでないが、星は紀行文 *Sea and Sardinia* に生き生きと描かれ、小説 *Plumed Serpent* の中でも、ケトサルコアトル賛歌の中心を成す重要語である。*The Spinner and the Monks* と同じ時期に書かれた *Women in Love* では、ロレンスの代弁者パーキンが次のように語っている。

“But I, myself, who am myself, what have I to do with equality with any other man or woman? In the spirit, I am as separate as one star is from another, as different in quality and quantity. Establish a state on *that*.”⁽⁸⁾

「ぼくはひとつの星が他の星と違うように孤立しているのだ。量質ともに違うんだ。」というパーキンの言葉に代弁されるように、ロレンスの言う living connection は、自己と他者が完全に同質のものになるような性質のものではない。人間は平等だという甘い認識を排除し、不平等を原則として、しかもそれぞれの星が広大な宇宙の機構の中で均衡を保っているように、人も又、自己の価値を失うことなく他者との均

衡状態の中で生きることを意味している。そして、均衡を保ちながら oneness に至ることを彼は夢みたのである。機械や科学によって、人の営みが mechanical になり、宇宙との関わりを断たれてしまった現代において、人は宇宙の生命力を再び流れ込ませることによってしか living connection をもつことは不可能だと、ロレンスは考えた。本来言葉では表現し難い自己や他者との separateness や union を伝えるためには、比喻を用いて読者にイメージを喚起させるしか方法がなかったのであろうか。そのためか、ここでは、導入個所にみられる写実的明析な文体は消滅し、多様なイメージが反響しながらテーマを明らかにする figurative, あるいは imaginative な価値をもつ文体に変化する。しかしながら作品構造の視点からみると、比喻による光と闇のイメージは、この場面での対比を成すと同時に、spinner の sun はこれまでの Italian の shadow, 教会における darkness とは対比構造を成しているのである。

(5)

spinner に続く渓谷の primrose の描写には、これまで見出ししてきたような顕著な対比表現や比喻表現があるわけではない。導入の descriptive な文体とは違った思想性には乏しいが、ごく自然な透明度の高い descriptive な文体が現れる。読者は太陽に照らされたテラスで布を織る老女に移入されたロレンスの哲学の提示のあとで、密やかに咲く primrose の描写になごやかなやさしい気持ちを味わうであろう。このような人間の心理には直接関わりのない情景描写も又、ロレンスの文体のひとつの特徴を表している。往々にして、彼が感応した spirit of place は、このような透明感を湛える写実的な文体を生み出す。

しかし、ここでも shadowless world of shadow という語句に目をとめる時、光と闇という二元的構造のひとつを表していると気付くのは、余りにも分析偏向的であろうか。

これまでの描写を見直すと、次のように光と闇の世界が交互に現れている。

描写対象	中心となる語句	
Italian	shadow	(闇)
the Church of San		(光)
Tammaso	tremendous sunshine	
inside the Church	darkness	(闇)
spinner and the	sun, morning,	(光)
terrace of the	marvellous clarity	
Church	of sunshine	
primrose	shadowless world	(闇)
	of the shadow	

primrose の描写の直後、再び up in the sunshine, world of glowing light と表現される世界となり、最後の the monks の描写では、光でも闇でもない twilight の世界が現れ、対比的構造が融合される。この primrose の咲く渓谷も、shadowless world であるから、既に最後の場面への前ぶれを感じさせ、我々は自然の成りゆきのような作品構成に、ロレンスの単なる旅行記を超えた紀行文作家としての資質を見る思いがする。

(6)

最後の夕闇の中を歩く 2 人の monks の描写における文体の特徴の key となる語句は、backwards and forwards である。この語句自体が対を成していることは偶然にすぎないかも知れないが、この 2 人の monks の歩調を表現する backwards and forwards はまず反復語として機能する。語や文の反復は、ロレンスに見られる文体特徴であるが、ここでも 8 回反復される backwards and forwards は、反復される度にその語句と共起する表現とが合体して、何か生命ある力を帯びてくるようであり、作品構造における機能語としての価値をもつようになる。backwards and forwards は反復される度に、monks の水平運動としてイメージが定着し、言語構造における水平の線として機能する。それは、もうひとつの線——はるか頭上に雪をいただく山頂と、その上に姿を現した月と地上とを結ぶ垂直の線が意識される時、思想的な意味を含む機能語となる。雪と月は、上なる否存在 (not being) を象徴する。垂直線は not

being と人間 (being) とを結ぶ線である。水平線は sun に象徴される光の世界と darkness に象徴される闇の世界とを結ぶ線と考えられる。monks が一定の速度で動く backwards and forwards は、光と闇との間を行き来しているのであって、それが形成する水平線と not being と being の間の垂直線との交叉点は、すべてが調和融合するポイントとして、言語構造的にも思想的にも興味深い意味を内包している。

(7)

The Spinner and the Monks には、複数の対比表現が重なりあっていることをこれまで考察してきた。導入の部分は、語、文、パラグラフが対比表現で成立し、それは論点の移動と共に視点を拡大し、叙述に descriptive な文体効果を与えている。Italian の描写から the Church of San Tammaso, spinner, primrose までの描写には光と闇が交互し、又、作者と対象との間には絶えず疎外感があって、自己と他者という心理的な対比が表されている。この光と闇という二元的世界は、darkness と sun を中心にして多様な比喩が響きあって imaginative な文体に表出される。最後の 2 人の monks の描写は、それまでの対比表現が示してきた二元的なるものが調和一致する場を啓示する。それは、あれかこれかの決断を迫るのでもなく、あるいは一方が他方を呑みこんでしまう支配的な関係によるのでもなく、紀行文中、星の暗喩に表されたように調和を保つことの出来る関係を共通の認識として出発するものである。昼 (光の世界) でも夜 (闇の世界) でもない夕闇 (twilight) の中を行き来する Monks の沈黙と動きに表現されたように、光と闇は相互規定的な存在であって、対を成して初めてその存在価値が顕わになり、そして闇と光が相交わる時刻、夕闇は、その二元的世界が調和を保つ時という暗示的な意味が付与されているのである。

ロレンスは 29 歳で祖国イギリスをあとにし、風と光に満ちた南フランス、ヴェンスにおいて 44 年の生涯を閉じるまで、イタリー、サルジニ

ア、オーストラリア、セイロン、メキシコ、へと憑かれたように旅を続けた。土地から次の土地へと移り住み、本能的ともいえる力で spirit of place に感応し、それを言語に表現していった。*the Spinner and the Monks* もそのような作家としての資質が注みだした紀行文である。

ness に至る道を追う inner travel と呼んでいる。彼の一連の作品はそのような inner travel の表出したものに他ならない。

The Spinner and the Monks 終結部における次のような自問は、彼の地上での、又、内面での旅が始まったことを示唆していると言えよう。

... Where, then, is the meeting-point: where in mankind is the ecstasy of light and dark together, the supreme transcendence of the afterglow, day hovering in the embrace of the coming night like two angels embracing in the heavens, . . . Where is the transcendent knowledge in our hearts, uniting sun and darkness, day and night, spirit and senses?⁽⁹⁾

それは、広大な Flesh における忘却への旅立ちであった。

(注)

- (1) D. H. Lawrence, *D. H. Lawrence and Italy* (New York: Viking Press, 1972), pp. 19-31.
- (2) Ibid., p. 20.
- (3) Ibid., p. 20.
- (4) Ibid., pp. 21-22.
- (5) D. H. Lawrence, *The Rainbow* (London: Heinemann, 1965), p. 189.
- (6) D. H. Lawrence, *D. H. Lawrence and Italy*, p. 26.
- (7) Ibid., p. 24.
- (8) D. H. Lawrence, *Woman in Love* (London: Heinemann, 1966)
- (9) D. H. Lawrence, *D. H. Lawrence and Italy*, p. 31.

